

小中高校生部門 最優秀賞

『ブンナよ、木からおりてこい』を読んで

小学五年生 宮川 弥子

わたしには老人し設に入っている八十七さいのおじいちゃんがあります。おじいちゃんはお見まいにいくたびにお母さんに言うことがちがいます。

「こんな役立たず、早く燃やしてくれ！」
と言ってみたり、

「人間はよくを失ったら終わりや。おじいちゃんはまだまだ美味しい物をたくさん食べて元気に長生きするわ！」

と言ってみたり。私は心の中で、

「なんでいつも言っていることがちがうんだろう」

とあきれていました。『ブンナよ、木からおりてこい』を読んだ時この物語に出ってくる動物達もおじいちゃんと同じで言っていることがころころ変わるのです。はいやな気分になりました。その中でも特にねずみが自分よりも立場の弱いすずめには、

「ひでエ傷だろ……まあいいさ……観念したよ」

と生きのびることをあきらめたように言ったかと思うと、すずめを食べて少しでも生きながらえたいという眼つきをしてみたり、今度は自分よりも立場の強いへびに対してはいつも冷血に丸飲みされてしまうのがこわくて、

「たすけてー。たすけてー」

とさけんでいるのに、

「へびさん……あんたも生きるためには大変苦労してきたんだね」

とへびを気づかうようなやさしいことを言ってみたりする。わたしにはおじいちゃんやこのねずみが本当は生きたいのか生きたくないのかどっちなのか全く分かりませんでした。でもブンナは、しいの木の穴でとびにおそわれ傷ついた動物達が最後に思うのはもっと「生きたい」ということなんだと気づきました。そし

て、

「おれから出た虫をくったきみが、元気になって、この木をおりてくれたらうれしい」

といったねずみの最後の言葉で自分のいのちは自分だけのものではない。大ぜいのいのちのかけはしなんだということも知ったのです。人も動物も生きるために一生けんめいだから強くなったり、弱くなったり、あきらめたり、あきらめなかつたりするのだらうと思います。きつとおじいちゃんも「生きる」ことに一生けんめいだからねずみのように言うことがそのたびにちがうのだと思います。そう思ったら、これからおじいちゃんがころころちがうことを言ってもきつと私は「がんばれー！」

という気持ちになると思います。そして今日一日を生きてゆくよろこび——私もブンナのように大きく大きくむねをはって生きていけたらいいなあと思います。